

塩谷郡市医師会だより

Contents

- 1 第6回市民公開講座
- 2 救急診療経過報告
- 3 学術講演会報告
- 4 シリーズ「塩谷医療史」7

社団法人 塩谷郡市医師会
広報委員会

〒329-1312

さくら市桜野1319番地3

さくら市氏家保健センター内

TEL 028(682)3518

FAX 028(682)5760

特集 第6回市民公開講座開催される



10月3日(日)午後1時からさくら市氏家公民館にて開催され200名の方に来場いただきました。今年で6回目を迎える市民公開講座で、さくら市では2回目となりました。

<基調講演>

栃木県内で唯一在宅ホスピス専門診療所長の渡辺邦彦先生に「在宅医療の実際」と題しお話をいただきました。

渡辺先生は以前栃木県がんセンターの緩和ケア病棟に勤務していましたが、自宅で最期を迎えたいという患者さんの希望をかなえるために在宅ホスピスを始めました。現在栃

木県内ならどこでも往診し、一年間の往診車の走行距離は7万Kmに及ぶそうです。

渡辺先生の奮闘ぶりと家庭に帰った末期がんの患者さんの



笑顔を書したスライドから、患者さんと家族の心のケア、「生きる」ことを支えている姿がとても印象的な講演でした。

最後に会場の方からの多数の質問にもわかり易く答えていただきました。

<運動療法講座>

さくら市をはじめ県内スポーツクラブ等で指導をされているAFAA認定インストラクターの加藤朋子先生(さくら市在住)が講演をしてくださいました。座ったままその場で行える、自宅でもちょっとしたすき間時間にできるものをいくつか教えてくれました。

人見健次さくら市長・山田会長・小林正樹さくら市副医師団長・司会の森島先生もステージに上がり、会場と一緒に「ヤングマン！」のテンポのよい曲に合わせて、楽しく手と足を動かしました。心地よい汗をかき、会場は笑顔いっぱいでした。

アンケートには医師会に対する感謝の意が多く寄せられました。在宅ホスピスに感動された方、肩こりが楽になった方、多くの方が心豊かな一日となりました。



塩谷郡市医師会ホームページ/メール

URL <http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/>
メール shioya@tochigi-med.or.jp

広報委員会編集部

岡 一雄 r2d2@msh.biglobe.ne.jp
尾形新一郎 ogata@o-ga-ta.or.jp

医師会事務局

桑川 shioya@triton.ocn.ne.jp
坂和 sakawa@e-shioya.jp

救急診療委員会開催される

1人医師で参加型、黒須病院に設置する方針に

■ 第1回救急診療委員会

日時：10月4日（月）午後7時から

（9月27日の臨時役員会で設置されることが決定）

出席者：山田会長、尾形新、岡副会長、
池田・後藤（矢板）小島・植木（塩谷）
佐野・半田（さくら）阿久津・越井（高根沢）
手塚（黒須病院）江口（塩谷病院）
尾形前会長（オブザーバー）

会議では全員参加、医師二人診療、365日体制を組むのが可能かなどについて話し合われた。その結果、医師一人体制で、全員参加ではなく協力医師で行い、365日夜7時から10時まで行うこと。その際、土・日・祝日は大学病院など外部からの医師（バイト）派遣を頼み、医師会の参加医師は平日準夜を担当し、参加医師の負担は年間12回（月1回ペース）以下に抑えること、クレマー対策、医療事故等の対策は行政の責任で行ってもらうことなどが決められた。

また、開設場所は黒須病院一か所か黒須病院・塩谷病院の交互開設かの2案が示され、各医師団で再度協議することとなった。

■ 第2回救急診療委員会

日時：10月25日（月）午後7時から

設置場所は当面黒須病院一か所にすることが確認された。また、医師派遣については10月7日付で獨協医科大学の寺野学長に要望書が提出され、その要望書が病院部長会に諮られたが、報酬額や派遣医師が内科系か外科系かなどの具体的な内容が知りたい旨の返事があったことが報告された。そのため、報酬額や内科系で小児の診療もあることなどの具体的な要望書を再提出することになった。

第2回県北救急医療連携体制協議会会議



11月15日（月）第2回県北救急医療連携体制協議会が矢板市イースタンホテルで開催された。塩谷郡市医師会、那須郡市医師会の会長、副会長、両地区の基幹病院の院長、連携室責任者、塩谷、大田原、黒磯那須消防本部救急担当者が出席した。

会議は、8月23日に大田原で行われた第1回協議会で出された一次、二次、三次医療の役割分担の明確化、ドクターカー、ドクターヘリ活用・運用方法の明確化などについて協議された。

学術講演会報告 I

早期胃がんの診断と治療の現状と問題点

日時：平成22年10月19日（火）

講師：自治医科大学附属さいたま医療センター
消化器科教授 吉田 行雄先生

消化管内視鏡を行う専門医には自明なことであろうが、検査を依頼する側の一般開業医には最近の内視鏡治療の進歩がよくわかる内容の講演であった。

従来、早期の胃がん（リンパ節転移の無いSMまでの病変）に対し内視鏡的粘膜切除術（EMR）が行われていたが、いままでは治療の対象外であった広範囲な病変や潰瘍瘻痕を伴う病変に対しても内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）で切除可能となってきている現状が、実際の手技や画像で詳しく示された。

日時：平成22年11月16日（火）

講師：自治医科大学神経内科准教授

脳卒中センター長 池口 邦彦先生

今回の講演は「全方位脳卒中臨床学」というだけあって非常に広範囲な内容であり、われわれ一般臨床家には咀嚼しにくかった印象があった。

脳梗塞には3つの基本病型があり、高血圧、糖尿病、高脂血症、喫煙などの生活習慣病が原因となるアテローム血栓性脳梗塞、高血圧が主因となるラクナ梗塞、心房細動などが原因となる心原性脳梗塞に分けられる。

それぞれの原因についての最近の知見について触れた。特に、一過性脳虚血発作(TIA)が再び注目されていること、心房細動による脳梗塞はアスピリンでは防げず、ワーファリン導入が重要だが INR コントロールが不十分な例が多い。しかし、今後ワーファリンより使いやすい新薬が早晚導入される予定であるという。

また、糖尿病はすべての脳卒中のリスクファクターであり、糖尿病治療中の場合、低血糖がリスクを上げることや、高血圧患者では低血圧がリスクになること、脳梗塞再発予防のための抗血小板薬が逆に脳出血のリスクになることなどが示された。



また、内視鏡的治療では入院期間も5日から1週間で済むため、患者さんにとってもメリットが大きい。

後半は胃がんの検診についての話題で、ペプシノーゲン（PG）法とヘリコバクターピロリ菌（HP）抗体検査について触れた。PG陽性は慢性胃炎の存在を示しており、HPは胃炎や胃潰瘍の原因であるが、HP抗体陽性率が高いために検診にはふさわしくないと考えられている。しかし、この二つの検査の組み合わせで、A群（PG、HP共に陰性）、B群（PG陰性、HP陽性）、C群（PG、HP共に陽性）、D群（PG陽性、HP陰性）の4つの群に分けると、D群が最も胃がんになりやすく、A群は最もなりにくい。そのため、リスクの高い人に内視鏡を行うことが可能であること示された。

講演関連ニュース

今回の講演会のすぐ後に、11月16日の下野新聞で大田原市が来年度から胃がんの危険度がわかる血液検査「胃がんハイリスク（ABC）検診」を県内で初めて導入することになったことが報じられた。40歳以上75歳未満の5歳刻みでPG検査とHP抗体の組み合わせ検診を実施する。対象者はこのABC検診か従来のバリウムによるX線検査のどちらかを集団健診で選択する。

大田原市は子宮頸がんワクチン導入、ヒブワクチン、肺炎球菌ワクチンの公費補助など、県内では先進的に医療の充実を進めている。

祝 橋本克彦先生日本医師会長表彰

橋本克彦先生（矢板市）は、永年の学校医の活動が評価され、11月20日（土）前橋市で行われた第44回全国学校保健・学校医大会全国大会で表彰を受けました。

■事務局からのお知らせ

恒例の新年会が23年1月21日（金）高根沢医師団担当で開催予定です。場所等詳細は追ってご案内いたします。

お忙しいかと思いますが多くの方の出席をお願いします

医師会長 小林 義雄（氏家）

司馬遼太郎原作「坂の上の雲」がNHKで放送されている。愛媛県出身の秋山好古・真之兄弟と正岡子規が主人公で、情熱に溢れた若者たちが中央に出て時代の波に翻弄されながらもその才能を開花させ、新しい文化や歴史を創っていく、まさに明治という時代を理解するのに最適な物語である。その正岡子規の高弟のひとり、新傾向俳句（後の自由律俳句）で有名な河東碧梧桐が、昭和2年2度目の氏家訪問時に集まった人たちの集合写真が残されている。その中に、若き日の小林義雄を見つけることができる。集合写真の一部を切り取ってみると、後列左から3人目堂々たる体躯が小林義雄、その左前に着座し眼光鋭いのが黒須菊三九である。ちなみに後列左端は檜山猛郎先生の父上の檜山誠吉である。肝心の河東碧梧桐は前列右端の人物である。



昭和2年撮影 小林義雄会長：後列左から3人目

小林義雄は戦後の塩谷郡の新生医師会初代会長である。明治24年氏家町に生まれ、昭和37年没、墓は西導寺にある。東京大学医学部を大正8年に卒業するが、一高の同級生には俳人の水原秋桜子、東龍太郎（東京都知事、日本赤十字社社長）、石橋長英（日独

交流協会会長、獨協医科大学初代学長）などがある。学生時代は野球、柔道、ボートに活躍したという。大正12年に氏家町に至誠堂医院を開業するが、昭和3年には台湾総督府技師となり、昭和19年台北帝国大学教授（熱帯医学）となり、終戦まで台湾で生活していた。

昭和22年、台湾から引き揚げ、氏家町に再開業し、翌23年に新生塩谷郡医師会の初代会長に就任する。

それまで会長職にあったのは第一回で取り上げた矢板の西垣勝熊である。戦後GHQは戦前から要職に就いていた者を公職追放したが、医師会役員も例外ではなく西垣は会長職を退かざるを得なかった。また当時栃木県医師会副会長であった黒須菊三九も同様に退くことになった。その辺の事情は塩谷郡市医師会史を参照してほしい。

長らく台湾にいて、戦後引き揚げて来たばかりの小林義雄がいきなり会長になるのはどうも腑に落ちないと思っていたら、前出の写真が黒須菊三九と小林義雄の結びつきを示していたのである。この写真は小林義雄が台湾に行く前年に撮られたものだったのである。小林は医師会の実力者である黒須菊三九の後押しで会長に就任したと考えるのが自然であろう。

小林はその後昭和28年には氏家町の教育委員長、昭和30年から栃木県会議員を2期務め、大物ぶりを発揮する。

水原秋桜子を同期生に持ち、河東碧梧桐の歓迎会に参加した小林義雄だったが、家族から聞いた話では俳句は作らなかつたらしい。また、黒須菊三九も多少は俳句を詠んだが、結社には積極的に参加しなかつた。

（担当：岡一雄）